

ことにおいて他の人より先にやったり、一日一つずつでも他の人のために良い行いを成せば、それによって自分の将来が明るくなります。

右手の行いを左手が知らないうちに成すこと、他の人よりも少し先に起きて苦勞することによって他の人が助かること、これはすべて目に見えない善なる行いなのです。神様はこのような人を覚えられます。

私たちは今まで、「為に生きなさい」というみ言を聞いてきました。お父様は一生涯懸けて為に生きる生活態度を保ってこられました。人知れず為に生きようとする心、これこそ真なる心持ちなのです。

はっきりした目的意識を持つこと

人は目的意識がはっきりしていなければなりません。人が不幸になるのは、その目的意識がはっきりしていないためです。目的意識が変わればサタンが侵入します。ですから目的意識をはっきりとし、自己管理を良くしなければなりません。どんなことがあっても気まぐれを起こさず、深刻な人でなければなりません。決して横的にことを怠る

人になってはなりません。私たちはこのことを日常考えて、一日一日を重ねていかなければなりません。

自分より劣る息子を持った父親はどれほど恥ずかしい思いをするでしょうか。子供は親よりも優れていなければならないのです。優れた子供を持った父母は栄光を享受するのです。神様はアダム・エバによって栄光を享受しようとされました。つまり神様は、人間を創造されてご自分よりも立派な子女となることを願われたのです。

例えば、博士である父母が子供には、「お前は学士にまでなれ」と言うことがあるでしょうか。自分より立派な息子を見て喜びたがるのが父母の心なのです。同じように誇りしい弟子を持ちたがるのが師なのです。この点を良く知ってほしいのです。目的意識をはっきりと持つこと、これが信仰の道を勝利する出発点なのです。

(韓国の『統一世界』九〇年十月号)

から翻訳転載。文責編集部)

新しい価値観の定立のために

三大主体思想 (前編)

この文章は、韓国統一思想研究院の李相憲院長が、韓国紙「世界日報」の論説委員会において語られたものです。今日、価値観の崩壊によって社会は大混乱状態にあります。この混乱を解決するために文鮮明先生が提示された、三大主体思想を根拠とした新しい価値観が紹介されています。なお、李院長は現在「世界日報」の主筆を兼任されています。

이 상 헌
李相憲

(1) 論説執筆における四大原則

前に論説執筆に関して何回か話しましたが、その中で言論の方向性に対する四大原則を話したことがあります。すなわち価値観を扱うこと、目標の提示、代案の提示、そして予言者の立場の堅持等です。

この四つの原則の中で、今日は価値観を扱うことについて話そうと思います。皆さんも知っていますように、文先生は価値観を強調されます。ところで、何を根拠として価値観を主張されるのか疑わしく思われる方がいるかもしれません。そこで、きょうはこのことに関して具体的に話そうと思います。

(2) 新しい価値観の提示

四大原則のうち、価値観を扱うことは、結局、価値観をただ扱うだけでなく、新しい価値観の提示にまで、すなわち新しい価値観の定立ということに連ならなければなりません。今日、価値観の崩壊現象は広範にわたっており、国民は何が真であり、何が善であるか、方向が分からなくなっています。皆様はこれまで漠然と価値観を扱ってきましたが、これからは新しい価値観を扱う必要があります。

なぜならば、古い従来の伝統的な価値観は現在、人間の心を指導する能力を失ってきており、世界は今、新しい価値観を必要とする時代に突入したと言えるからです。それで、真に国民や人類の心を指導しうる価値観、だれでも従うことができる価値観の提示が必要になってくるのです。このような意味で、価値観を扱うことは、当然、新しい価値観の提示に連らなければなりません。ここで価値観とは、物質的価値ではなくて精神的価値のことです。すなわち真善美の価値をいいます。何が真であり、何が善であり、何が美であるかということですが、そのうち特に善について扱おうと思います。

(4) 神の真の愛

神の真の愛とは、要するに神の絶対愛のことです。神は絶対者であるために神の愛は絶対愛です。ここで絶対とは世俗的な意味の絶対とは違います。ここでいう絶対は、永遠不変性と無限性と普遍性をいいます。我々は普通、神は永遠的存在であるといえます。また神は存在しないところがない遍在の方だといえます。したがって神の愛もまた永遠であり、遍在性です。このような内容をもつ愛が真の愛であります。

例えば太陽光線のようなものです。太陽光線は地球の表面上、どこでも照らさない所がありません。また常に休まず継続して照らしています。それと同じように、神の愛は包括的で全人類のみならず、すべての万物に対しても施される愛です。被造世界全体が神の愛の対象です。神の愛から外れる対象はこの宇宙にはありません。普通、愛といえは親しい人間同士の愛のように思われますが、文先生のいう愛はそのような愛ばかりではありません。親しい人間同士はもちろん、敵までも愛し、また万物までも愛する愛です。

人間は上下、前後、左右にいろいろな人々つきあつて

善とは何であるか、早く国民に知らせなければならぬからです。新しい価値観とは、要するに、文先生の価値観のことであつて、三大主体思想を根拠とした価値観であります。

(3) 三大主体思想

では、三大主体思想に関連して新しい価値観の問題を扱うことにします。三大主体思想とは皆様は、おそらく初めて聞く言葉だと思いますが、統一教会では、すでに以前からよく使われています。

三大主体とは、父母と師と主人のことです。言い換えれば、三大中心のことです。父母は家庭の中心であり、師、先生は学校の中心であり、主人は主管の中心です。ここで主管の中心とは、団体、企業、会社、国家等の中心をいうのであつて、管理や統治の責任者のことです。組合の長、政党の党首、連合会の会長等の団体の長や、会社の社長、道の知事、国家の大統領等がみな総括的に主人の概念に含まれます。この父母と師と主人の三つの中心を三大主体といえます。このような主体に関する理論が三大主体思想であつて、この三大主体が神の真の愛を実践しなければならぬという理論です。

います。上には上司や父母、下には子供や部下、前には師(先生)、先輩、指導者、後には弟子、後輩、追従者、右には兄弟、親友、同僚、左には自分と意見の合わない者、自分に敵対する者までいます。このように、いろいろな方向のいろいろな階層の人々をすべて愛するのが真なる愛です。そればかりでなく、自然万物までも愛するのが真なる愛です。このような神の真なる愛を実践しなければならぬというのが三大主体思想であります。

ここで愛の定義をします。愛とはいったい何でしょう？ 愛とは、人間や万物に温情を施しながら喜ばせることです。対象の為に生きることです。自分の為ではありません。世間の愛は、自分の利益を得ようという潜在的な目的をもって愛する愛です。しかし文先生の教える愛は、何かを得ようとするのではなく、ただひたすら与える愛です。このように、愛とは限りなく温情を施すものです。いかにして愛を施すかといえば、親しく話すとか、相手を理解するとか、物質や金銭を与える、協助する、奉仕する、苦境から救う、抱擁する、怨讐を許す、親切に教える等、いろいろあります。このようにして温情をもって与えるのが真なる愛です。与えてまた与える精神を利他主義また為他主義といえます。

(5) 三大主体の真なる愛

このように神の真なる愛とは、他のために与えてまた与える愛です。ちょうど温泉が限りなく湧いてくると同じように、限りなく、絶え間なく、温情の泉を注ぐのが真なる愛です。三大主体がこのような愛を日常生活において実践せよというのが三大主体思想です。すなわち、父母が真なる愛を子女に対して実践せよということです。また、先生が真なる愛を生徒に対して実践せよということです。また主人が、つまり大統領や知事や社長や団体の長たちが、自分の部下たちに対して真なる愛を実践せよということです。

ところでいかに実践するのでしょうか？ 主体の役割を通じて実践せよということです。父母の子供に対する役割は子供を養育することです。「養」とは、食べさせる、着せる、寝かせる、住居を与えるなどをいいます。このようなことを通じて愛を施せということです。すなわち良く食べさせ、良く着せ、良く住ませながら、愛を施せということです。食べさせながら温情を施す、着せながら温情を施す、また住ませながら温情を施すということです。「育」とは、教育のことです。礼儀作法を教えるとか、倫理道徳を教えることです。知識も教えます。ここにも父母の深い温情が必要

です。

このように父母が養育という役割を通じて、子供に神の真なる愛を施すのです。子供を愛する時、子供が大きくなったら子供から何か利益を得ようというような考えを持つてはいけません。子供を養い教育して、将来、子供を通じて金もうけするとか権力を得ようというような考えを持つてはいけません。子供が善人となり、立派な人格を備えた知識人、奉仕のできる社会人になることをひたすら願って、温情を施しながら養育せよということです。これが養育を通じて父母の真なる愛です。

次に師の愛です。師の役割は教えることです。知識教育、技術教育、体育、芸術教育等がそれです。このような教育を通じて、親切に、真心を込めて生徒を養うことです。質問があれば親切に誠意をもって答えます。また、難しい問題があれば可能なかぎり助けてやります。そうしながら神の真の愛を実践するのです。近ごろ、先生たちは収入のために教えているようにみえます。それは知識を売買することです。そのような教え方は絶対にいけません。そこには愛が宿るはずがないからです。金をもうけるのは第二的な問題です。学生に至誠を込めて教えることを優先的な目標としなければなりません。そしてその教えは、学生が社

会に奉仕しうる人格者になるようにすることです。そのためにはまず、先生自身が、人格的姿勢、奉仕的姿勢を持たなければなりません。そのような姿勢でもって、温情を施しながら、教えるのが師の真なる愛です。すなわち師の愛とは、このような師の役割を通じて実現される愛です。

次は主人の役割を通じての主人の愛です。主人の役割とは何でしょうか？ 大統領の役割は、国民をよく治めて国民がよい生活をするようにすることです。道知事は道民のために努力するのであり、企業体の長は従業員たちをよく保護し、彼らのために生きることです。

ここで企業体の場合をもっと詳しく説明してみましよう。企業体の長は部下や従業員たちに仕事ばかりさせて、金を多くもうけて、畜財しようという考えを捨てなければなりません。企業体であるから、もちろん金をもうけなければなりません。もうけるからには与えなければなりません。与えるためにもうけるという精神が企業体の精神です。企業体の主人は利他主義の奉仕精神を持たなければなりません。そして従業員たちのために奉仕し、愛を注がなければなりません。衣食住において困難な状態にあるのではないかと、従業員たちの事情に関心をもち、温情を注がなければなりません。これが愛の主管です。

主管には、部下に命令するという主管もあります。命令それ自体は冷たいものですが、温かい温情の心を持って命令すれば、命令自体はたとえ冷たくても、命令を受ける部下は感謝の心でもって受け取れます。命令が温かく感じられるからです。

聖書には、神が人間に与えた三大祝福のことが書かれています。その中の第三祝福は、愛でもって万物を主管せよという命令です。第一次産業、第二次産業、第三次産業等、すべて万物主管の概念に含まれます。万物を愛で主管するのである。したがって建物や施設も自分の物である以前に、公的な物、神の物であるとみるのです。それで財産や施設を真心を込めて管理、維持、保存するということが、「愛でもって万物を主管する」という主管精神であり、管理精神なのです。

このごろの深刻な公害問題は、このような本然の主管精神、管理精神がないことから生じたものです。万物に対するこのような愛の精神、すなわち主管精神、管理精神も、また主人の真なる愛の心です。以上述べたように、三大主体が真なる愛を実践しなければならぬという理論が三大主体理論です。

(つづく)